Buddhism and Hinduism in Champa "Amaravati" through the 9th - 13th century: Study of the Dong D??ng site and Phong Le site in central Vietnam

著者	グエン フーマン
著者別表示	Nguyen Huu Manh
journal or publication title	博士論文要旨Abstract
学位授与番号	13301甲第5100号
学位名	博士（学術）
学位授与年月日	2020-03-22
URL	http://hdl.handle.net/2297/00058753

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

様式　7（Form 7）

学　位　論　文　要　旨
Dissertation Abstract

学位請求論文題名 Dissertation Title

Buddhism and Hinduism in Champa "Amaravati" through the 9th - 13th century: Study of the Đồng Dương site and Phong Lệ site in central Vietnam

---

（和訳または英訳）Japanese or English Translation

9世紀から13世紀のチャンパ「アマラーヴァティー」における仏教とヒンドゥー教：ベトナム中部のドンズォン遺跡とフォンレ遺跡の研究

人間社会環境学　専　攻（Division）

氏　　名（Name）　NGUYEN HUU MANH

主任指導教員氏名（Primary Supervisor）　足立　拓朗

（注）学位論文要旨の表紙
Note: This is the cover page of the dissertation abstract.

SUMMARY

Buddhism and Hinduism in Champa "Amaravati" through the 9th - 13th century: Study of the Đồng Dương site and Phong Lệ site in central Vietnam

NGUYEN HUU MANH

This dissertation focuses on Buddhism and Hindu developed in the "Amaravati" region of Champa, from the 9th to the 13th centuries CE. "Amaravati" was one of Champa polities/principalities, generally identified with what is now Quảng Nam province and Đà Nẵng city in central Vietnam.

Amaravati land can be described as a polity or a "mandala" in Champa history. Champa temple-towers, citadels, and inscriptions remain there. Located between the mountains and the sea, the region lay on rather narrow areas of riverine and coastal plains with difficult access in ancient times except by river or sea due to the rugged terrain.

Based on previous studies and my reconnaissance works carried out in 2017-2018, 69 Champa sites in Amaravati are divided into four riverine groups: Cu Đê river group, Hàn/Cẩm Lệ river group, Thu Bồn river group and Tam Kì/Trường Giang river group. In my dissertation, site distribution maps of Quảng Nam - Đà Nẵng are created by GIS, aiming to use the maps for analyzing the spatial distribution of Champa relics in Quảng Nam - Đà Nẵng and to reconstruct the spatial structure of Amaravati riverine polity. Along with the maps, site documentation lists are also created, including documentations for temple-towers, citadels, and inscriptions. The lists form an important database, expected to play a role in managing Champa relics in Quảng Nam - Đà Nẵng.

Regarding Champa history, the famous work "Le Royaume de Champa" by G. Maspero (1928) describes that, after the war with Đại Việt (Vietnamese) in 982, the "Đồng Dương dynasty" collapsed and the capital of Champa was transferred from "Amaravati" southward to "Vijaya."

Although Maspero stated that “Amaravati” polity declined through the 10th century and onward, and his idea has influenced the subsequent scholarly works, it now needs to be reexamined, based on recent advancement of archaeological and historical studies.

To reexamine the history of Amaravati in Champa, this thesis mainly deals with two important religious sites: Đồng Dương and Phong Lệ. Phong Lệ is a large-scale Hindu temple-towers where some Vietnamese archaeologists, including the author, have carried out excavations through the 2010s. The Phong Lệ excavations’ results are discussed in detail, which has revealed a part of the overall plan of temple-towers with the architectural features and sculptures. It helps to clarify the role and significance of the Phong Lệ complex, not only in Amaravati but also in Champa.

Subsequently, the focus of discussion shifts to a large-scale Mahayana Buddhist monastery called Đồng Dương flourished through the 9th century. The magnificent architectures and sculptures of Đồng Dương define one specific art style of Champa. The art remains, and inscriptions from Đồng Dương suggest the belief and practice of Mahayana and Tantric Buddhism among Champa royal families and elite classes, mainly dated from the 9th to the 10th centuries. It was a period when Buddhism held a strong position in Champa, especially under the Indrapura dynasty of Champa.

In conclusion, this thesis emphasizes that Amaravati was an essential region in Champa history from the 9th to 13th centuries, even after the crucial event in the 10th century, the collapse of “Đồng Dương dynasty” that Maspero emphasized. During that period, the history of Amaravati can be illustrated by various Champa relics with their significance. In particular, the relationship between Buddhism and Hinduism practiced in Amaravati, represented by the Phong Lệ site and the Đồng Dương site, can be an important key to unraveling the history of Amaravati.

この論文は 9 世紀から 13 世紀にかけて、チャンパの「アマラーヴァティー」地域に展開した仏教とヒンドゥー教に注目する。「アマラーヴァティー」とはチャンパの地域政体あるいは侯国の一つであったと考えられ、一般に現在のベトナム中部・クァンナム省とダナン市に比定される。

アマラーヴァティーの地はチャンパ史のなかで一つの「マンダラ」であると述べられることがある。そこにはチャンパの寺院・塔、都城、碑文が残されている。山と海の間にあって、アマラーヴァティーは川沿いや海沿いに開けた狭い平野に依拠しており、周囲の山々ゆえに、古代には川や海から近づく以外にはアクセスは困難であった。

先行研究と、私自身が 2017 年・2018 年に実施した踏査にもとづくと、アマラーヴァティー地域で確認されている 69 カ所のチャンパ遺跡は四つのグループに分けられる：クデ川グループ、ハン／カムレ川グループ、トゥーボン川グループ、そしてチュォンザン川グループ、である。本論文では、GIS を利用してクァンナム-ダナン地域の遺跡分布地図を作成した。その地図を利用してクァンナム-ダナンにおけるチャンパ遺跡の空間分布を分析し、アマラーヴァティーという川筋政体の空間的構造を復元したいためである。それら地図の作成に伴って、遺跡のドキュメンテーションリストも作成した。それには寺院・塔、都城、碑文のドキュメンテーションが含まれる。そのリストはデータベースとして、クァンナム-ダナン地域のチャンパ遺跡を管理するためにも役割を果たすことが期待される。

チャンパの歴史に関して、G.マスペロは有名な著作『チャンパ王国』(1928 年)の中で以下のように述べた。チャンパの「ドンズォン王朝」が 982 年に大越（ベトナム）と戦った後に崩壊し、都が「アマラーヴァティー」から南の「ヴィジャヤ」へと移された。マスペロは「アマラーヴァティー」政体が 10 世紀以降には衰退したと考え、その後の研究に影響を与えた。しかし今、近年の考古学的・歴史学的研究の進展を受けて、マスペロの説は再考される必要がある。

チャンパにおけるアマラーヴァティーの歴史を再検討するために、本論文は二つの重要な宗教遺跡に注目する：ドンズォンとフォンレである。フォンレは大規模なヒンドゥー教の寺院遺跡で、ここでは筆者を含むベトナム人考古学者が 2010 年代に発掘を実施した。その発掘の成果は本論文の中で詳しく論じられるが、それは建築遺構と彫刻から構成される寺院-塔の全体プランを部分的に明らかにした。発掘によってアマラーヴァティーのみならず、チャンパ全体の中におけるフォンレの役割と重要性が明示されたのである。

続いて、9 世紀を通して繁栄した大規模な大乗仏教僧院であるドンズォンについて論じる。その壮麗な建築と彫刻群はチャンパの中でも一つの特別な美術様式を画している。ドンズォンに残された美術と碑文は、9世紀から10世紀にかけて、チャンパの王族とエリート階級の間で大乗仏教と密教が信仰されたことを示唆している。それはチャンパのインドラプラ王朝において、仏教が強い位置づけにあった時代であった。

本論文の結論部分で、アマラーヴァティーは 9 世紀から 13 世紀、すなわちマスペロが主張した「ドンズォン王朝」崩壊という深刻な出来事を経た 10 世紀の後も、チャンパ史にとって非常に重要な地域であったことが強調される。その時代のアマラーヴァティーの歴史は、それぞれの重要性をもつ多様なチャンパ遺跡によって例証される。特に、代表的な存在としてフォンレ遺跡とドンズォン遺跡に注目したように、アマラーヴァティーにおいて信仰された仏教とヒンドゥー教の関係は、その地の歴史をひもとく重要な鍵となっているのである。

学位論文審査報告書

2020 年　2 月　13 日

１　論文提出者

金沢大学大学院人間社会環境研究科

専　攻　　人間社会環境学専攻

氏　名　　NGUYEN HUU MANH

２　学位論文題目（外国語の場合は，和訳を付記すること。）

Buddhism and Hinduism in Champa “Amaravati” through the 9th – 13th century: Study of the Đồng Dương site and Phong Lệ site in central Vietnam

9 世紀から 13 世紀のチャンパ「アマラーヴァティー」における仏教とヒンドゥー教：ベトナム中部のドンズォン遺跡とフォンレ遺跡の研究

３　審査結果

判　　定（いずれかに〇印）　合 格　・　不合格

授与学位（いずれかに〇印）　博士（ 社会環境学・文学・法学・経済学・学術 ）

４　学位論文審査委員

委員長　足立　拓朗　㊞

委　員　中村　慎一

委　員　中村　誠一

委　員　森　雅秀

委　員　矢口　直道

委　員　山形　眞理子（岡山理科大学）

（学位論文審査委員全員の審査により判定した。）

５　論文審査の結果の要旨

本論文は現在のベトナム中部に存在したチャンパ王国の歴史を 9 世紀から 13 世紀に焦点をしぼって考古学的に考察する内容である。チャンパ王国では国家が成立した後 3 世紀以降、「アマラーヴァティー」と呼ばれる地域が政治的・宗教的中心であった。しかし、10 世紀に大越（ベトナム）による侵攻を受けて、南部の「ヴィジャヤ」地域に遷都し、それ以降は「アマラーヴァティー」地域は衰退したと考えられてきた。この仮説は、フランス極東学院の東洋学者 G.マスペロによる大著『チャンパ王国』(1928 年)の中で述べられている。このマスペロ説は、その後のチャンパ史研究に影響を与えた。しかし、近年の歴史学的研究で、このマスペロ説は再考されつつある。本論文は考古学的な成果により、このマスペロ説を再検討する内容となっている。「アマラーヴァティー」とはチャンパの地域政体あるいは侯国の一つであったと考えられ、一般に現在のベトナム中部・クァンナム省とダナン特別市の地域に比定される。

本論文は、チャンパ王国の遺跡と碑文資料のドキュメンテーション、遺跡の分布、仏教やヒンドゥー教寺院の伽藍配置、寺院出土の遺物などの分析から、「アマラーヴァティー」地域が遷都後もチャンパ史の中で重要な役割を果たしたことを論証している。遷都後も「アマラーヴァティー」地域の重要性が継続するという考え自体は、本論文独自のものではないが、多数の考古学的資料を駆使して論証した点は大いに評価されるべきであり、今後のベトナム考古学の発展に大きく寄与することは確実である。

１章で本研究の背景を述べた後、２章では執筆者が 2017 、2018 年にクァンナム・ダナン地域で実施した踏査の内容が述べられている。本章で、筆者は「アマラーヴァティー」地域の 69 件のチャンパ遺跡の正確な遺跡分布地図を作成した。その地図を利用してクァンナム・ダナン地域におけるチャンパ遺跡の空間分布を分析し、「アマラーヴァティー」という川筋政体の空間的構造を復元した。その結果、踏査した 69 遺跡を四つのグループに分類した。クデ川グループ、ハン・カムレ川グループ、トゥーボン川グループ、 そしてチュォンザン川グループである。それら地図の作成に伴って、遺跡のドキュメンテーションリストも作成した。そのリストはデータベースとして、今後のクァンナム・ダナン地域のチャンパ遺跡を保全するために大きな役割を果たすことが期待される。また、本ドキュメンテーションは、中部ベトナムのチャンパ関連遺跡を集成した情報として、最新かつ膨大なものとなっており、また英文によって当該期の正確な資料を提示したことは、今後の国際的な研究の発展にも資するところが大きいと判断される。

筆者はチャンパ王国における「アマラーヴァティー」の歴史を再検討するために、二つの重要な宗教遺跡（フォンレ遺跡とドンズォン遺跡）に注目した。３章では、ダナン特別市フォンレ遺跡について述べている。本遺跡は大規模なヒンドゥー教の寺院遺跡で、ここ

では筆者を含むベトナム人考古学者が 2010 年から発掘調査を実施している。その発掘成果は本論文の中で詳しく論じられており、伽藍配置や遺跡の全体プランを部分的に明らかにしている。その結果、アマラーヴァティーのみならず、チャンパ王国全体の中におけるフォンレ遺跡の役割と重要性が明示された。この部分は、一次資料を公開する意味での価値も高いと考えられる。

４章ではクァンナム省ドンズォン遺跡について述べられている。本遺跡は 9 世紀を通して繁栄した大規模な大乗仏教の僧院であったと考えられる。その壮麗な建築と彫刻群はチャンパ王国の中でも一つの特別な美術様式を有していた。ドンズォン遺跡に残された美術と碑文は、9 世紀から 10 世紀にかけて、チャンパの王族とエリート階級の間で仏教が信仰されたことを示唆している。それはチャンパ王国のインドラプラ王朝において、仏教が強い位置づけにあった時代であった。予備審査段階では、ドンズォン遺跡などにおける仏教関係学術用語の不備などが指摘されたが、その後の指導により適切に修正された。そのため、このドンズォン遺跡の出土遺物の考察部分は、今後、ベトナムの仏教考古学において重要な位置を占めると期待される。

また４章後半では、クァンナム省の南に位置するクァンガイ省チョーイ山出土の仏教奉献板について述べている。本資料は東南アジア美術史や仏教史の研究者が注目しており、本論文による詳細な情報の提示は、特に国際的な成果が早期に期待される部分である。

２章の遺跡・碑文資料のドキュメンテーションが本論文の多くの部分を占めている。その成果は評価に値するが、遺跡分布の図示については様々な地理情報を駆使することにより、さらに詳細な分析が可能ではなかったのか、という指摘もあった。また碑文の翻訳が完全に掲載されていない点などの不備も存在する。

３～４章の発掘調査の成果を述べる部分は、筆者の独自資料を駆使しており、高く評価できる部分である。ただ、遺物・遺構の図面をさらに多く図示することも可能だったのではいか、という意見もあった。

しかしながら、独自資料を堅実に整理し、マスペロ仮説を考古学に再考する論証部分には説得力がある。また、これまで述べてきたように、筆者が発掘調査した一次資料を英語で提示した部分は、今後の国際的なベトナム考古学研究に大きな貢献すると思われる。全体的には博士論文の水準は十分に満たしており、審査員全一致で博士（学術）の学位取得を合格と判断した。